



Title	機械技術を用いた京紅板締版木の制作
Author(s)	桂, 阿子
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100292
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

機械技術を用いた京紅板締版木の制作

桂 阿子 京都女子大学

はじめに

近年、インクジェットプリンターの普及は著しく、繊維業界はプリント生地を容易に、かつ大量に生産することが可能になった。しかし、その原点である多くの伝統的な型染め技法は衰退の一途を辿り、後継者不足によって技法そのものが無くなってしまったものや、行き場を失ってしまった型染め道具などが多く存在する。一方で、産業化、並びにデジタル化が確立された現代において手仕事の魅力的価値は高まっている。

京紅板締め

京紅板締めは、江戸時代中期に京都で考案された庶民の染色文化を代表する技法である。紅花の長時間染色に耐えうる唯一の防染方法であったことや、量産に適した技法であったことから、長襦袢や間着、まわり下着の胴や袖部分として町衆から愛された。

明治初年から合成染料の輸入が増加し始め、京紅板締めに使用する染料も紅花から合成染料へと転換していった。より短時間で安価な染色が可能になり生産量が増大し、庶民の生活にますます浸透していった。しかし、合成染料の広がりは、写し友禅等に代表される自由な文様表現と大量生産が可能な新たな技術の出現にもつながり、結果として京紅板締めは衰退を余儀なくされた。

課題と目的

昭和初期にその技法が途絶え、京紅板締めの技術の詳細は現在に伝わっていない。しかし近年、

放置されていた資料や板締めを行っていた染屋の血縁者などが見つかったことにより、徐々に当時の染屋の様子や技術が明らかとなってきている。

また、資料の調査、分析とともに、染色技法を復元する取り組みも行われている。平成19年には、群馬県高崎市にある吉村染工場に残されていた染色裂と紅板締めの資料をもとに、染色家の吉村晴子氏が代表を務める「たかさき紅の会」によって紅板締めの染めの復元が行われた。この復元作業のなかで、「手彫りによって新たに彫り起こした版木」、「当時の型式に倣った楔型の締め具」、「ボルトとナットで締める現代的な締め具」の制作が試みられており、締め具の制作については、ボルトとナットを用いて現代化を図った方法が考案されている。しかし、版木については手彫りによる復元のみであり、制作には長期間を要している。また、版木の模様は資料の版木を複写したものを使用している。

そこで本研究では、京紅板締めの技術工芸的な復元と技法の継承を目的とし、京紅板締めの意匠の特徴を踏襲しながら、現代的で親しみやすい新たな文様のデザインと、現代の機械技術を用いた版木の制作方法を提案する。

新たな文様のデザイン

資料や文献から読み取った京紅板締めの文様の特徴を活かしながら、新たに現代的な図案「ハート繋ぎ」(図1)を考案した。

伝統技術に親しみがない人が興味を持つきっかけになるように、現代的であり、紅板締めの魅力

を引き立てるため、赤色のイメージを持ち、京紅板締めの文様に多用される「繋ぎ」の配置が可能なハートをモチーフとした。

また、京紅板締めの文様に多くみられる「鹿の子絞り文様を模した柄」をデザインに取り入れた。そして、この絞り文様が密集する部分は、制作した型でどの程度細かな文様の染色が可能であるかという検証にもつながると考える。

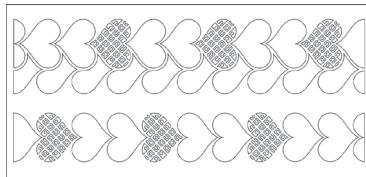


図1 「ハート繋ぎ」

機械技術を用いた版木の制作

京紅板締めの版木彫刻には、組み合わせる版木の文様を完全に一致させるために、相当な技量が必要となる。板締めの彫刻師が途絶え、詳細な彫刻方法が伝わっていない今、手彫りでの版木制作は非常に難しい。また、一般的に板締めの版木には、水に強く粘りがあり、柔らかく彫りやすいホオノキが使用されていた。しかし、当時存在しなかった新しい素材が開発され、機械技術の発達により、手彫りでは難しい素材にも彫刻することが可能になった現代において、版木に適した材料は木材だけではなくなっていると考える。

のことから、以下2種類の新たな版木の制作方法を検討した。
①機械彫りの版木（図2）：ホオノキを使用し、木材やプラスチックなどの加工が可能なCNC工作機械を用いて彫刻する。
②アクリル製の版木（図3）：木材よりも耐候性が高く、扱いやすいアクリルを使用し、レーザー加工機で彫刻する。
①②それぞれの版木について染色実験を行い、実際に京紅板締めの版木として使用可能か検証した。

まとめ

新たな文様のデザインの考案と版木の制作にあ

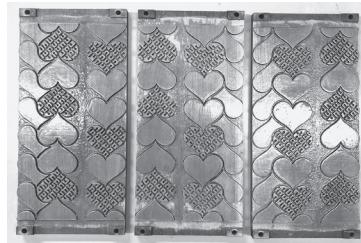


図2 機械彫りの版木



図3 アクリル製の版木

たっては、京都市産業技術研究所での資料の調査を行った。この調査を通して、文献だけではわからなかった版木や締め具の細かな寸法を確認し、版木制作に活かすことができた。また、版木の文様を新たに考案したことは、今までの復元作業でも行われてこなかったことである。京紅板締めの文様の特徴を学び、そこからデザインを考案したことで、実際に染色できる文様とその版木を生み出すことができた。

新たな版木の制作と染色実験の結果を通して、以下の成果が得られた。京紅板締めの版木制作には特別な技術を要し、手彫りの制作は膨大な時間がかかる。それに対して機械彫りは、下絵を3Dにおこすためのソフトウェアの操作スキルがあれば、短時間で正確な彫刻が可能であることが証明できた。アクリル製の版木においても、ホオノキとは全く異なる特徴を持ちながらも京紅板締め版木として使用できることができた。

この研究の成果は、染色技術はそのままに手仕事の良さを残しつつ、より効率的な版木制作を実現したといえる。この新たな版木が京紅板締め技術の復活につながれば幸いである。

版木制作協力：株式会社デザイオ

版木デザイン協力：

京都女子大学令和5年度卒業生 小林華奈